土井ヶ浜地区の発掘調査成果から「浜出祭」の源流を考える

松下　孝幸※

プロローグ（物語のはじまり）

下関市豊北町には不思議なことが存在する。まず一つ目は、角島を謳った歌が万葉集に収められていることである。だれが謳ったのだろうか。二つ目は平城宮跡から「角島のワカメ」と記された木簡が出土していることである。どこからだれが都に角島のワカメを送ったのだろうか。三つ目は土井ヶ浜地区に「一の宮」と「二の宮」が存在することである。旧国では「一の宮」と「二の宮」はそれぞれ一ヶ所しか存在しないはずなのに、長門国には長府の「一の宮」「二の宮」のほかに、この土井ヶ浜地区にも「一の宮」と「二の宮」と呼称される神社が存在するのはなぜだろうか。現地では「神田一の宮」「神田二の宮」と呼称されている。しかも「神田一の宮」（住吉神社）の創建は 719 年と伝わる（山口県神社誌、1998）。710 年の平城京遷都からわずか 9 年後のことである。奈良時代の土井ヶ浜地区になぜ神社が建立されたのであろうか。また、豊北町では町内最大の民俗祭礼行事である浜出祭が 7 年に 1 度挙行される。この式年祭は田耕地区にあった厳島神社から蛭子社（えびすしゃ）のあった土井ヶ浜へのご神幸であるが、なぜ厳島神社は約 18㎞も離れている土井ヶ浜へ向かうのだろうか。

このような疑問を一挙に解決する遺跡が見つかった。これらの疑問を、土井ヶ浜地区での発掘調査の成果から読み解いてみたい。

なお、本稿は本館で 2024 年度（令和 6 年度）第 3 回企画展「発掘調査の成果から浜出祭を考える」（会期：2024 年 12 月 17 日～ 2025 年 5 月 18 日）を開催するにあたり、検討した内容をまとめたものである。

1. 万葉集に収録された角島、都に送られた角島のワカメ

角島を謳った歌、「角嶋の迫門 (せと) の稚海藻 (わかめ) は人のむた荒かりしかどわがむたは和海藻 (にぎめ)」が万葉集巻 16 に収められている。万葉集は全 20 巻からなる奈良時代末（7 世紀後半から 8 世紀後半）に編纂された我が国最古の歌集である。なぜ、角島が謳われているのであろうか。誰が謳ったのだろうか。当時、文字の読み書きや、歌を作ることができたのは上流階級の官人（ゆわゆる貴族）しかいないはずである。

角島のワカメが奈良の都に送られていた。1963 年秋、平城宮跡の天皇の住居の内裏、東北方で大量の土器とともに 1843 点の木簡が出土した。そのなかに「長門国豊浦郡都濃嶋所出稚海藻　天平十八年三月廿九日」（天平 18 年は 746 年）と書かれた木簡があったのである。角島から都に送られたワカメにつけられた木札（荷札）である。どのような経緯で運ばれたのであろうか。

2. 角島の「牛牧」

延喜式巻 28　兵部省の条に「長門国宇養馬牧・角嶋牛牧」とある。延喜式とは、醍醐天皇が延喜 5 年（905）に左大臣藤原時平等に詔して編纂させたもので、延長 5 年（927）に完成した。朝廷年

中の儀式百官臨時の作法や国々の定例などを記録したものである。この記録から、角島での牛牧は平安時代にはおこなわれていたことがわかる。

３．役所の存在

延喜式の記載によって角島での「牛牧」は平安時代にはおこなわれていたことは確実であるが、神田一の宮の創建が 719 年だとすれば、角島での牛牧は奈良時代にすでに始まっていたと推測される。律令国家を目指す奈良朝は国策として馬と牛の飼育を始め、馬牧と牛牧を各地に設けたといわれている。長門国にも宇養に馬牧を、角嶋に牛牧を設けた。宇養はどこのことか、場所は不明であるが、角嶋とは角島のことである。角島には「牧崎」という地名が残っている。牛の管理や衛生上の問題を考えれば、離島で牛を飼う方が都合がよかったのであろう。しかも角島は本土との距離がそれほど遠くなく、管理がしやすかったと推測される。国営の牛牧ができれば、それを管理する役所が必要になり、その役所とその地域を加護するために神社が建立される。その神社がのちの神田一の宮（住吉神社）とよばれるようになった神社であろう。

また、角島の牛牧は奈良時代にはすでに始まっていたと考えられるのは、万葉集に角島が謳われていることからも推測される。万葉集は奈良時代末に編纂されているからである。歌を作ることができた官人（役人）がいたこと、すなわち奈良時代に役所があったことの証である。しかし、その役所がどこにあったのかが、まったくわからなかったのである。

土井ヶ浜周辺の遺跡と土井ヶ浜祭場（写真の上が西）

４．土井ヶ浜地区の発掘調査

2001 年から 2005 年までの 5 年間、豊北町では圃場整備事業に伴って、発掘調査を 45 ヶ所でおこなった。そのうちの 9 ヶ所は土井ヶ浜地区の遺跡である（註 1）。この発掘調査で、宮ノ下遺跡から秤のおもり（権）、硯（四脚方形硯、坏蓋転用硯）、官位を示す帯金具（鉸具、巡訪、丸鞆）、緑釉陶器、製塩土器などが出土しており、河原田遺跡からは石製の帯飾り（丸鞆）が出土している。寺ヶ浴遺跡からも緑釉陶器のほかに製塩土器や刻書土器も出土している。これらの出土品から、古代（奈良時代、平安時代）に役所（官衙類似施設）が存在し、各地から様々な物資が搬入されていたことが判明した。緑釉陶器は、長門産のものだけではなく、尾張産や京都産のものも搬入されていた。

ついに古代の役所（官衙類似施設）が土井ヶ浜に存在したことが、土井ヶ浜地区の発掘調査で、重要な遺物が出土したことによって明らかになったのである。

権（けん）

（宮ノ下遺跡）

鉸具（かこ）

巡訪（じゅんぽう）

丸鞆（まるとも）

帯金具（宮ノ下遺跡）

さらに宮ノ下遺跡、寺ヶ浴遺跡、切畑遺跡、波原遺跡、片瀬遺跡からは大量の白磁や青磁などの貿易陶磁器類が出土している、宮ノ下遺跡からは初期高麗青磁やタイ産陶器壷も出土している。宋銭も多数出土している。宋銭は、切畑遺跡から熙寧元寶が、片瀬遺跡からは大観通宝が出土している。

また、片瀬遺跡からは墨書磁器が出土している。中国商人が、底部裏面（高台）に姓や記号を書き込んで自分の商品とわかるようにしたものであるが、墨書があると商品にならないので、搬入港で遺棄したという。従って墨書磁器が出土するということは、この場所が搬入港であることの証拠になる。片瀬遺跡の墨書磁器は、この地が搬入港であったことを示していることになる。

貿易陶磁器（白磁・青磁）

（寺ヶ浴遺跡・古殿遺跡）

銅銭（唐銭、宋銭）

（宮ノ下遺跡・波原遺跡）

陶磁器

（寺ヶ浴遺跡、宮ノ下遺跡）

このように大量の白磁や青磁などの貿易陶磁器類や宋銭が出土していることから、平安時代末から鎌倉時代には日宋貿易による大量の輸入品が土井ヶ浜に荷揚げされるようになり、土井ヶ浜はこれらの物資の搬入港、物流拠点になっていたことも明らかになった。

すなわち、角島に国営の牛牧が設けられ、これを管理するための役所が土井ヶ浜に造られ、役所とこの地域を守護する神社（一の宮＝住吉神社）が創建され、周辺は「神田」として一の宮の所領となった。土井ヶ浜の役所には各地から物資が搬入されるようになり、古代の物流拠点になった。この土井ヶ浜の役所にいた役人（官人）によって、角島が謳われ、奈良の都に角島のワカメが送られるようになったのであろう。

平安時代末になると日宋貿易によってもたらされた物資も土井ヶ浜へ届くようになった。日宋貿易を主導し実権を持っていたのは平家であり、その守護神である厳島神社である。この時期、土井ヶ浜地区は平家の所領となっていたことも重要である。土井ヶ浜地区には役所だけではなく、商人達も居住していたであろう。波原遺跡からは京都で製作されたことがわかっている和鏡が出土している。波原遺跡周辺に関西系の商人が居住していた可能性もある。

平家が滅亡しても商業活動は継続されたであろう。日宋貿易などの物流拠点になっていた土井ヶ浜地区は鎌倉幕府にとっても重要な地域とみなされ、鎌倉の御家人たちが派遣され、貿易品など物資の管理をおこなっていた可能性がある。土井ヶ浜地区に残っている鎌倉と関係のある名称（鎌倉の森、鶴岡八幡宮）は、ここに常駐していた鎌倉の御家人たちが鎌倉にちなんでつけたり、創建したのであろう。元寇のあと、神功皇后神社が土井ヶ浜に建立されたのも、ここに鎌倉の御家人達の拠点があったからと思われる。

寺ヶ浴（てらがき）遺跡からは、白磁と鉄刀を副葬された身長が 169.67cm もある屈強な男性骨が出土した（ST-0001 人骨、壮年）。中世人で身長が約 170cm もある大男は知られていない。日宋貿易にかかわっていた重要な人物であったと思われ、宋人かもしれない。

寺ヶ浴遺跡 ST-0001 人骨

宋（南宋）が滅んだあと、2 度にわたる元寇（モンゴル襲来）によって、公的な中国・朝鮮との貿易は中断したであろうが、私的な民間の交易は続いていたと想像される。膨大な利益が得られる貿易がそう簡単になくなるはずがない。鎌倉時代後期頃になると海進によってそれまで土井ヶ浜にあった入り江（港）が砂の堆積によって埋まってしまい、使用できなると、その後は、寄港する港を北へ変更しながら、土井ヶ浜周辺へ至る航路は、のちの時代まで重要な交易海路として機能していたと思われる。

このように日宋貿易による物資の搬入港が土井ヶ浜にあり、その交易に平家と厳島神社が深く関わっており、その背後に関西の商人がいて、物流を担っていたと考えると、厳島神社と土井ヶ浜との関わりが見えてくる。おそらく土井ヶ浜に日宋貿易による物資が着くと、厳島神社と貿易品を売りさばき搬送する商人たちは、厳島神社の祭神を先頭に立てて、貿易品を受け取りに土井ヶ浜まで出向い

たものと推測することが可能である。

５．日宋貿易

物資の交易においては、当然対価を支払わなければならない。日宋貿易では、何を対価として支払っていたのであろうか。中国船は中国から積載してきた物資を下ろしたあとは、日本の物資を積んで中国へ向かったはずである。土井ヶ浜では、何を積載したのであろうか。長登（ながのぼり）銅山など美祢地域の鉱物資源が有力候補かもしれないが、この時期、長登銅山は操業していないという。その理由は日常什器が出土しないからである。しかし、官営の長登銅山は操業していなくても、民間の鉱山はほぞぼそと操業していた可能性は捨てきれない。土井ヶ浜地区の発掘調査では日本側から輸出したと考えられる物資は出土していない。

田耕の厳島神社が日宋貿易に関与したと推測すれば、物資は土井ヶ浜から田耕へ運ばれたと想定したい。この物資の搬送ルート（土井ヶ浜と田耕を結ぶルート）を「土井ヶ浜街道」と仮称しておきたい。やがて、大内時代になると明との貿易が始まる。交易品の搬送は関門海峡から椹野川を遡るルートが合理的で、安全である。この海上ルートのほかに、北浦の肥中（ひじゅう）港で荷揚げし、道場門前まで至る陸路の「肥中街道」が知られているが、このルートは、それまで使われていた土井ヶ浜へ至る日宋貿易の海上ルートを踏襲したものだったことが容易に推測できる。

なぜ、海路ではなく陸路で、しかも山間部を横断するような過酷で危険なルートで物資を運んだのか、以前から疑問であった。中世史の専門家に尋ねてみても回答はかえってこなかった。しかし、土井ヶ浜周辺の海岸へ至る物資や貿易品の海上ルートが平安時代から鎌倉時代に存在し、日本からの物資の輸出ルートとしても機能していたことが想定できると、大内氏はこれまでのルート（搬入港とそこからの陸上輸送ルート）を日明貿易でもそのまま使ったということが理解できる。

６．寄港地の移動

物資を積載した船は、奈良時代から鎌倉時代までは、土井ヶ浜に着いたと思われる。今は土井ヶ浜は約 1㎞の弓状の砂浜になっているが、当時は土井ヶ浜遺跡が存在する砂状の丘陵の南側は、海岸から入江状に海が入ってきていたと思われ、この入江（入海）に船が入ってきていたのだろう。この入江（入海）は今は水田になっており、小字は「戎沖（えびすおき）」である。蛭子社の沖という意味だろう。「戎沖」の東側は「浜屋」という字名である。鎌倉時代の後半頃には、この入江が砂の堆積によって閉じてしまい、船が入港できなくなった。そこで船が入れる入江状になった湾を北側に探して、港が北へ移動していったと思われる。旧神田小学校の前の浜は「東法（とうほう）の浜」と呼ばれている。最近筆者らはこの付近の小字の調査をおこなった。明治期に作成された字名一覧によれば、旧小学校の敷地を含む神田地区には「東法」「東法新開」「北東法」「北東法水浴」「先東法」という小字が存在し、字図をみると旧小学校の敷地を含む地区にこの「東坊」という地名がつく字が集中していることがわかった。また、改めてこの地を見ると、土井ヶ浜地区にそっくりな地形をしていることに気がついた。土井ヶ浜の港が機能しなくなったあと、港となったのは、この「東法の浜」にあった入江（入海）だったのではないだろうか。

「トウボウ」とは中国人居住地を意味し、「唐房」や「唐坊」と表記され、「唐」は中国、「坊（房）」は区画を表しているという（福津市教育委員会文化課作成のパンフレット、2022）。唐坊が形成されたのは 11 ～ 13 世紀（平安時代後期～鎌倉時代前期）で、中国は宋の時代である。

最近、福岡県福津市で「トウボウ」に関係がある遺跡がみつかった。その遺跡は「在自西ノ後遺跡（あらじにしのあと）」というが、この遺跡内の小字が「唐防地」で、この遺跡からは 12 ～ 13 世紀前半の貿易陶磁器が大量に出土している。その中には中国人名や貿易商人「綱首」と書かれた墨書磁器も確認されており、ここが宋人の貿易拠点と考えられている。「在自西ノ後遺跡（あらじにしのあと）」の報告書の中で、田上浩司氏は、「地勢と調査成果の検討から、在自西ノ後遺跡は小規模ながらも博多遺跡群と類似した交易をおこなう港湾集落であり、交通体系からも宗像社の港湾として好適な立地にあることを指摘」している。また、「多量の貿易陶磁器や墨書磁器の存在から宋人との関わりが推定できる。貿易の主体者は宗像社・宗像氏であ」るとも記している（福津市教育委員会、「在自西ノ後遺跡第 5・6 次調査」、福津市文化財調査報告書第 61 集、9 頁、2024）。

宋人と宗像神社との関係については、『宗像大宮司系図』によれば、1160 ～ 1264 年にかけて、宋人娘を妻もしくは母・祖母とする人物が宗像神社の大宮司職をほぼ独占する状況が続いていたという。この遺跡の発掘調査によって、宋商人と宗像神社とが一体となって、中国貿易をおこなっていた実態の一端が明らかになった。

旧神田小学校付近の字名が「東法」であることから、ここに中国人（宋人）の居住地があった可能性があるが、圃場整備事業に伴う発掘調査は、この地区ではおこなっていないので、考古学的証拠はまだない。この「東法」がある場所は、豊北町の西海岸に存在するにもかかわらず「東」をあてているが、これは中国人の居住地の本拠地が西方にあり、そこから見て、東の方向にある坊（法）という意味だろうか。その本拠地は「在自西ノ後遺跡」にあった「トウボウ」かもしれない。

大内時代になると寄港地が移動し、貿易船が着く港が「肥中（ひじゅう）」になった。豊北町史には、「鎌倉末期から戦国にかけて、島戸・肥中には海関があって、海士ヶ瀬（あまがせ）を通る船の勘過料（通行税）をとった」（豊北町史、174 頁、1972）、とあり、同書の 487 頁にも「島戸・肥中港には中世から水上関があり」とある。角川日本地名大辞典 35　山口県の 1233 頁には「島戸・肥中には海上関が設けられ、通行税（勘過料）を徴収し、水先案内を行っていた」と記載されており、その根拠となる史料も示されている。

このように海岸線の変化や船の大きさ、船の構造、航行技術の変化などによって、入港する港が時代とともに移動していったようである。

７．浜出祭の起源１（これまでの仮説）

浜出祭は昭和 51 年（1976）11 月 24 日、山口県指定無形民俗文化財に指定されたが、「指定の意見書」には、浜出祭の起源について、「浜出祭は蒙古軍の怨霊の祟りを鎮めるために始められたなどという傅へがあるが、それは単なる口承の域を出ずるものではなく」「それぞれの生産を異にした山地と浜の陰陽和合による式年の祭禮礼行事によって、その都度祭政一致によって村内の繁栄と秩序を乞い願わんとしたものと思われる」として、その起源を陰陽和合としており、蒙古襲来との関連を口

承に過ぎないとして一蹴している。（『浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭』、1983）

一方、明治 34 ～ 37 年頃に、近藤清石によって編纂された『山口県風土誌』には、「浜殿祭は蒙古退治の故事と云って、満七年ごとに小野の厳島神社から、神玉の土井ヶ浜に御神幸がある。社伝によると弘安四年蒙古が来襲した際に、探題北条武蔵野守は執事小笠原原二郎入道を以て、厳島社司加藤治郎太輔並びに社僧の大専坊に、外敵降伏の祈祷をさせた。外寇の注進が激しくなるにおよんで、鎌倉から井上左京亮なる者が下向して、当社に外敵降伏の祈願をした。七月蒙古の兵船は筑前博多に来襲したが、敗れて神田村土井ヶ浜に漂着した。我が兵はこれを逆襲して破った。敵将は身長七尺余と云う豪勇の者で、囲いを破り残兵を率いて滝部地三千原で戦ったがまた破れ、遂に田耕五千原で敗走した。我が兵はこれを追跡して蒙古兵を全滅した。この時敵将は白羽の矢に射られて死んだが、これを神の射給うところとみな崇めた。そこで勝捷を神に奏せんと川の渡瀬で祓をした。ここを化粧瀬と云う。また敵将の首を埋めた所を鬼ヶ原と云った。弘安六年始めて土井ヶ浜に御神幸した。その後止んでいたところ疫病が流行したので占うと、恒例を怠るからとのお告げであったので、浜殿祭を復活したところ疫病が止んだので、それ以来続けることになった。」（浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭 14 頁、1983）とある。この文章では、蒙古兵を殲滅したという戦記のあとに、いきなり「弘安六年始めて土井ヶ浜に御神幸した」とあり、浜出祭を始めた理由はまったく記載されていない。浜出祭を止めていたら、疫病が流行したので、占ったら浜出祭を怠ったのが原因だというので、復活したとあり、復活した理由を記載しているにすぎない。

どうやら、後世の人が、この近藤清石が書いた『山口県風土誌』に記載されている浜出祭復活の理由を根拠にして、「蒙古兵の怨霊を鎮めるための鎮魂や慰霊のために浜出祭がおこなわれるようになった」と解釈するようになったと思われる。しかし、浜出祭の神事や祭事のなかに蒙古兵の慰霊や鎮魂に関するような所作はみあたらない。

そもそも、社伝によると記載されているが、この社伝が文字資料なのか口伝に過ぎないのかも定かではない。また、日本を攻めにきて、戦死した蒙古兵を慰霊するために、わざわざ 18㎞もの距離を歩いて、土井ヶ浜まで出向く必要があるのだろうかという、素朴な疑問が湧く。しかも蒙古兵の上陸地点は土井ヶ浜だけではないのに、なぜ厳島神社はほかの場所、例えば阿川や粟野ではなく、土井ヶ浜に向かうのか、その理由もわからない。

意見書では陰陽和合説を採用しているが、そもそも蛭子社と厳島神社とは格が違いすぎる。蛭子社は弥生時代以降、土井ヶ浜に移入してくる外来者の「拠り所」守り神、外来神であろう。かたや厳島神社は平家の守護神である。両者は対等ではない。浜出祭の神事や祭礼の内容をみると、主体は田耕の厳島神社側であって、蛭子社（神玉）側ではない。厳島神社側が土井ヶ浜へ出向き、神事と祭礼をおこなう。祭事の中心は「鰤切」のような饗応（もてなし）の儀式なのであるが、「鰤切」をおこなうのは、厳島神社側であり、この饗応の主体者はあくまで厳島神社なのである。

ちなみに、民俗学事典の「えびす」の項には、「平安時代末期より、西宮戎社（兵庫県西宮市）を中心として、漁民の漂着神としてのえびす神信仰から、商業の神、市神としてのえびす信仰が生まれ、平安時代末期以降、全国的に展開する。」（日本民俗大辞典、吉川弘文館、208 頁、1999）とある。

圃場整備事業に伴う発掘調査を土井ヶ浜地区の 9 地点でおこなったが、元寇に関係のありそうな

遺構や遺物はまったく検出できなかった。土井ヶ浜地区以外でも発掘調査をおこなったが、いずれも元寇関連遺物は出土していない。また、元寇の祭に亡くなったと思われる人骨もまったく発見されていない。

元寇関連の遺構や遺物、遺骨が見つかっていないことから、元寇がなかったという言うつもりはないが、発掘調査で見つかるような痕跡を大地には残していなかったようで、その規模や影響はあまり大きくはなかったことが予想される。

８．浜出祭の起源２（新しい仮説）

土井ヶ浜地区における発掘調査の結果から、土井ヶ浜地区には、古代に、角島の牛牧を管理する役所があり、役所や土井ヶ浜地区を守護するために一の宮が創建され、物資が土井ヶ浜にもたらされており、古代末から鎌倉時代にかけては、日宋貿易による貿易品などの物資の荷揚港、物資の物流拠点として土井ヶ浜が機能していたことがわかった。日宋貿易は平家が主導し、厳島神社がかかわっていたことから、田耕の厳島神社がこの日宋貿易、物流に関わっていた可能性が想定できる。田耕の厳島神社の土井ヶ浜への御神幸（土井ヶ浜詣で）は、この日宋貿易による物資の受け取りと配送のためであり、土井ヶ浜では日宋貿易などに関わった海商、関西系や地元商人への饗応（もてなし）がおこなわれたと思われる。この行事が、のちに形式が整った浜出祭の源流だったのでははないだろうか。浜出祭の最初の「きっかけ」は厳島神社と中国商人（宋人）、関西系商人、在地の商人などによる一連の商業活動だったと推測したい。

９．その他、参考になる事柄

（１）神社の合祀

蛭子社は明治 39 年（1906）に神功皇后神社に合祀された。厳島神社は昭和 30 年（1955）に田耕神社に合祀された。蛭子社の創建などは不明である。また、田耕の厳島神社の創建も不明である。厳島神社について詳細はわかっていないが、『田耕村寺社由来』には由緒・棟札等を消失したと伝えている（浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭、14 頁、1983）。

（２）神田一の宮（住吉神社）

神田一の宮（住吉神社）は下関市豊北町大字神田上 5871 番地に所在する。『山口懸神誌』によれば、奈良時代の養老三年（719）、国防上の見地から神田別府が置かれると共に、藤原範貞が宇佐八幡宮を勧請して、一ノの宮神田別府八幡宮が創建されたことになっている。その後、江戸時代の宝暦年間（1751 ～ 64）、一の宮住吉大神と改められたと伝える。祭神は底筒男命（そこつつのおのみこと）、中筒男命（なかつつのおのみこと）、表筒男命（うわつつのおのみこと）である。（『山口懸神社誌』902-903、1998）

また、『山口県の地名』には、「社伝では養老三年（719）藤原範貞が宇佐八幡宮（現大分県宇佐市）を勧請したと伝え、古くは神田八幡宮・神田別府八幡宮・一宮八幡宮などと称せられたが、宝暦年中（1751 ～ 64）に一の宮住吉大神と改めたと伝える。」とある。（『山口県の地名』平凡社、1980）

しかし、宇佐八幡宮は神亀二年（725）の創建と伝わる。神田一の宮（神田別府八幡宮）の創建719 年のあとなので、この記事は矛盾してる。そもそも奈良時代の年代が正確かは議論の余地があるので、おおむねこの年代と理解しておけば大過ないと考えられる。神田一の宮が宇佐八幡宮を勧請して創建されたかはあまり重要ではない。土井ヶ浜に役所が置かれたことが重要で、その役所を加護し、外敵の侵入を阻止するための神社創建と考える方が自然であろう。

（3）神田という地名

土井ヶ浜地区や神田一の宮（住吉神社）のある地域は現在「神玉」と称されているが、もともとここが神田一の宮の所領の「神田」であろう。神田という地名は『和名類聚抄』に神田郷とあり、中世では神田別府と呼ばれた。（「浜出祭伝承活動記録作成浜出祭」4 頁）『和名類聚抄』は平安時代中期（承平年間：931-938）に作られた辞書である。

江戸中期の『地下上申』によれば、神田は神田上村、神田中村に分かれて庄屋・畔頭が置かれ、のちには一緒になって神田上村が残ったという。明治 6 年 12 月、大小区制が設けられて第 17 区第 8 小区となり、さらに明治 12 年神田上村より分かれて矢玉浦を置き、明治 22 年（1889）の町村制の施行と共に、神田上村と矢玉浦を一緒にして神玉村と改称し、昭和 30 年 4 月 1 日、町村合併法の施行と共に神玉村は豊北町に合併したのである。（「浜出祭伝承活動記録作成浜出祭」5 頁）

すなわち土井ヶ浜周辺がもともと「神田」であって、商船が寄港する港が、時代ともに土井ヶ浜から北側へと移動していくに従って、神田の範囲が北へ延びていき、旧神田小学校周辺地域がその中心地となった。そうすると土井ヶ浜周辺の神田の存在が希薄になり、神田上村と矢玉浦が合併し、「神玉村」となった。このような歴史的経過を経て、もともと神田の中心地であった地区は「神玉」と呼称されるようになり、ここが神田の起こりであったことが忘れられてしまうことになった。

（4）浜出祭の記録

浜出祭が山口県指定無形民俗文化財に指定された際の「指定の意見書」には、「浜出祭執行記録は元文 3 年（1738）のものが最も古く」とあるが、『浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭』によれば、「殿居厳島神社林正基家文書によって、殿居神職の参加が、元禄 16 年頃まで遡り得る」ことがわかり、元禄 16 年頃（1703）には浜出祭が行われていたことがわかった。すなわち、信頼に足る最古の文字記録としては、この「元禄 16 年頃」で、18 世紀の初めには浜出祭がおこなわれていたことになる。いまのところ中世まで遡る文字記録は存在しない。しかし、これまでみてきたように、土井ヶ浜に奈良・平安時代に役所（官衙類似施設）が存在し、物資の搬入港になっており、平安時代末から鎌倉時代には日宋貿易による物資の荷揚港として機能し、物流拠点になっており、その物資の配送には、商人のほかに、日宋貿易を主導し、実権を握っていた平氏や厳島神社が関わっていたことを考えれば、厳島神社の土井ヶ浜への御神幸は、こうした商業活動の一環としておこなわれていたということが容易に理解できる。

（5）長門探題のこと、今後の課題

浜出祭の起源については、元寇（蒙古襲来）の際に戦死した元軍への鎮魂説があるので、元寇についても触れておく必要があろう。文永の役（文永 11 年、1274 年）後の長門の政治的な動きを、「長門探題」をキーワードとして山口県史や下関市史で渉猟してみた。

長門探題について、「山口県史　通史編　中世」では 135 頁から 136 頁にかけて次のように記載されている。

「長門探題とは、鎌倉幕府の長門統治の職名であり、実質的には長門守護の別称である。

長門探題の史料上の所見は、文書では、元弘三年（1333）三月二十八日忽那重清軍忠状に「長門周防探題上野前司時直」と見えるほか「忽那一族軍忠次第」に「周防長門両国探題上野前司時直」とあり、その他、『太平記』（巻 11）の「長門探題降参事」の段に「長門ノ探題遠江守時直」なとと見えるが、いずれも鎌倉最末期に長門・周防守護であった北条時直についてのみしか知られていない。

長門守護は蒙古に対する防備に備えて、建治元年（1275）十一月頃北条宗頼（時宗の弟）が長門守護に補任されて以降北条一門に移ったが、宗頼以降、長門・周防両国は一人守護兼補となった。これは長門・周防両国が、異国防御上、九州に次ぐ要地であることから講じられた措置であり、一般の守護より一段強い機能を有していたと考えられる。

また、長門守護には、宗頼以降、兼時（宗頼の子）、宗政（宗頼の兄）、業時（重時の子）、実政（実時の子）、時村（政村の子）、熙時（時村の孫）、時仲（熙時の弟）、時直（実政の弟）と、北条一門が就いている。」

また、下関市史の 428 頁には次のように記載されている。

「建長四年（1252 年）、信濃四郎左衛門尉行忠が長門国の守護職になったとき、守護代として鎌倉から赴任した三井宮内左衛の館跡が、安岡にある「三太屋敷」である。建物敷地の周囲には約 3㍍の高さの土塁が築かれている。文永十一（1274）年に文永の役が起こり、元軍が豊浦町室津に上陸した。建治元年（1275）に元の使者、杜世忠らが室津に着いたが、同年 9 月 5 日鎌倉で刎首された。三井氏は、建治二年（1276）、北条宋頼が守護するまでの 24 年間守護代として在職し、その後、任を解かれたのち室津へ移った。」（下関市史、428 頁、2008）

要するに、長門探題とは長門守護の別称であること、長門探題という名称は、今のところ、鎌倉鎌倉最末期に長門・周防守護であった北条時直についてのみしか知られていない、ということと、長門守護は蒙古襲来に備えて、建治元年（1275 年）に北条宗頼が長門守護に補任されて以降北条一門が担ったと、いうことである。これは長門一体を北条氏が支配したことを意味し、それまでいた御家人の力が減じたことを意味しているのであろうか。

これらの資料からは、当時、豊北町土井ヶ浜周辺にどのような御家人がいたのかを知ることはできない。元寇のあと、なぜ土井ヶ浜という場所に神功皇后神社を創建したのかの事情を知る手がかりも存在しない。神功皇后神社を土井ヶ浜に創建したのは、やはりこの地に鎌倉の有力な御家人が以前から常駐していたからだと推測したい。

また、豊北町での荘園の存在についても、「平安末期から鎌倉期にかけては、豊北地方においても貴族あるいは寺社の荘園があったと考えられるが、明らかではない」（豊北町史、173 頁、1972）という。古代においては、角島に牛牧があり、土井ヶ浜には役所が存在し、近傍には一の宮（住吉神社）が鎮座し、古代末から鎌倉時代前期にかけては日宋貿易の荷揚港となっていた場所にもかかわらず、その様子を知ることができる文献史料が存在しない。今後、古代末から鎌倉時代にかけての考古学、文献史学での研究が進展することを切に期待したい。

10. 最後に

これまで述べてきた様々な状況証拠は、田耕の厳島神社が日宋貿易などの商業活動に深くかかわり、物資の搬入港である土井ヶ浜へ出向き、神事・祭事と宴会を催したことが、浜出祭の源流になっていたのではないかということを強く示唆している。

祭礼行事（お祭り）は、なんらかのきっかけで始まり、その時代の政治的環境や、文化的環境、経済状況で変容していく。日宋貿易が途絶えたあとでも、土井ヶ浜へ向かう御神幸は、その意味や形態を変えながら、現在まで継続されてきた豊北町の歴史絵巻が浜出祭（浜殿祭）であり、壮大な歴史ドラマである。

おそらく山口県ではこのように長い歴史をもつ壮大な祭礼行事は存在しないのではないだろうか。豊北町へ赴任して来た時の様々な疑問、万葉集に角島が謳われている歌が収録されていること、角島のワカメが平城京に送られていたこと、一の宮、二の宮が土井ヶ浜に存在することが、土井ヶ浜地区の発掘調査で、土井ヶ浜に役所（官衙類似施設）があったこと、平安時代末から鎌倉時代にかけて、日宋貿易に関係する物資の荷揚港となり、物流拠点になっていたことがわかったことによって、すべて繋がり、疑問が一気に解決した。考古学や人類学という学問のすばらしさを改めて実感している。

起源がまったく分からない浜出祭であるが、厳島神社のご神幸の目的地である「土井ヶ浜」における古代の歴史や、土井ヶ浜が古代末から鎌倉時代にかけて、日宋貿易の貿易品などの物資を搬入する荷揚港として、またこれらの物資の配送拠点として、殷賑を極めていたことを考慮すれば、厳島神社の土井ヶ浜詣でが、このような経済活動（商業活動）と無関係だとはとうてい思えないのである。状況証拠ばかりであるが、これらの証拠はきわめて重要な歴史の証人である。

註 1）
宮ノ下遺跡、切畑遺跡、寺ヶ浴遺跡、神田遺跡、広田遺跡、河原田遺跡、波原遺跡、森広遺跡、片瀬遺跡

≪参考文献≫

・豊北町教育委員会、1969、浜出祭の記録　山口県選択（記録等の措置を講ずる無形の民俗資料）
・豊北町教育委員会、1983、浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭
・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、下関市立豊北歴史民俗資料館、2025、だれでもわかる浜出祭ハンドブック。
・下関市立豊北歴史民俗資料館、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム、2011、浜出祭報告書ーⅠ（史料編）浜出祭の現在（平成 16 年祭りの実際）
・下関市教育委員会・他、2005、切畑遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 36 集、下関市文化財調査報告 7）

・下関市教育委員会・他、2005、宮ノ下遺跡・神田遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 37 集、下関市文化財調査報告 8）
・下関市教育委員会・他、2005、土井ヶ浜遺跡周辺遺跡群　寺ヶ浴遺跡・広田遺跡・磯地遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 38 集、下関市文化財調査報告 9）
・下関市教育委員会・他、2005、河原田遺跡（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第 39 集、下関市文化財調査報告 10）
・下関市教育委員会・他、2007、波原遺跡・森広遺跡・片山遺跡（下関市文化財調査報告 25）
・下関市教育委員会・他、2007、干焼田遺跡・片瀬遺跡（下関市文化財調査報告 24）
・福津市教育委員会、2024、在自西ノ後遺跡第 5・6 次調査（福津市文化財調査報告書第 61 集）
・日本民俗大辞典　上　下、吉川弘文館、1999
・豊北町史、1972
・豊北町史　二、1994
・山口県史　通史編　中世、2012
・下関市史　原始－中世、2008
・山口県神社庁、山口県神社誌、1998
・山口県の地名、平凡社、1980
・角川日本地名大辞典、角川書店、1988

＊ Takayuki　MATSUSHITA〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕